



「かつての非進学層」は大学をどのように利用しているのか：「親学歴」と「高校成績」を指標とする文化論的アプローチ

吉原, 恵子
加藤, 善子

(Citation)

大學教育研究, 16:51-80

(Issue Date)

2007-09

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81006838>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81006838>



「かつての非進学層」は大学をどのように利用しているのか ・「親学歴」と「高校成績」を指標とする文化論的アプローチ・

吉原恵子（兵庫大学）

加藤善子（関西国際大学）

1. 問題関心とその背景

(1) 大学と社会の関係

大学と社会の関係はそれ以前とは異なるものになってきている。かつては大学が社会に必要な知識や技術の基礎とそれを身につけた人材を供給していることは漠然と信じられてはいたが、一般的にそのメカニズムや効率性に関心がもたれることはなかった。現在では、大学は自らの生産する知識の交換価値を高め、大学の外にある「情報や知識の市場」（＝社会）の需要に応じて行かなくてはならなくなっている（矢野、2001）。この背景には社会が急速に知識基盤社会化したことが大きい要因としてあるであろう。

一方、大学進学率が高まり、高等教育がユニバーサル段階に達し、学生の質が多様化してきていること、さらには大学評価や授業改善など一連の大学改革の流れのなかで、大学は学生に対する知の提供を自己像との関連において模索しなければならなくなっている。また、資格社会化が進み、これほど大学の知が外部社会との関連、とりわけ職業的レリパンスを求められている時代はないと言ってよいであろう。

もとより、日本社会では「学校の知識は社会では役に立たない」「大学の専門知識に期待していない…」といった言説が流布してきた（矢野、2001、pp.12-13）。しかし、なぜこれまで大学が社会とある程度遊離した世界で教育を行っていても許容されてきたのか、社会はなぜ大学を出た人材をそのまま受け入れてきたのか。一方、現実には学校に対して一定の信頼と期待が寄せられてきた。このような学校と社会の関係を歴史的に辿ることは本研究の目的ではない。ここでは、大学と社会の間で暗黙のうちにその存在を了解されてきた「正統化された知」の変質という視点から、ユニバーサル段階の大学をめぐる変化や混乱をより明快に読み解くことを試みる。

(2) 「知の生産体」としての大学の変化

本研究では、「正統化された知」の変質という枠組みにより、大学で起こっている変化について、とくにユニバーサル段階の「学生は大学をどのように利用しているか」に焦点を当てる。ここで、想定するのは知の共同体、知の生産体としての大学である。大学

を構成するメンバーにより、長年にわたり積み上げられてきた、また現在も日々紡ぎ出される知の集合体としての大学である。見えにくいとはいえ、ユニバーサル段階の大学であっても存在することが期待され、また実際に何らかの輪郭をもった知の文化が存在するはずである。

マス段階を経てユニバーサル段階に達した高等教育内部では、大学のレゾナデートルである「正統化された知」の生産体に、影響力のある構成メンバーとして非選抜型入試による学生が参入してきている。既存の知の共同体の文化に馴染みのない新しいメンバーが参入してくると、大学内部ではある種の文化葛藤が生じていると見ることができる。そうであれば、すぐに「隠れたカリキュラム」による学力差が問題となるが、日本の大学教育においてはこのような視角から問題設定がなされることはほとんどなかった。なぜなら、これまでの大学では、入学試験が学力を中心とした選抜であっても、この文化への適応力をかなりの程度保証するものとなっていたからである。

非選抜型試験による入学者が 50%を超える時代においては、大学入学者のうち相当数が持ち込む文化は大学の文化と親和的ではない可能性が高くなる。また、これらの入学者はいわば異文化である大学文化に適応し、文化差を乗り越える力が充分ではないことが予想される。これまでの大学では「大学で学ぶこと」と「学びの成果を挙げること」はゆるやかに連結していたと見てよいであろう。また、卒業時の就職（活動）における成功も、厳密な意味で学業成績が影響をもつとは考えられてこなかった。端的に言うなら、「正統化された知」の空間に身を置くことあるいは経由することが、学力や学業達成よりも高い価値をもってきた。

今や、この「正統化された知」の生産方式は変更を余儀なくされている。大学の知が市場性を求められる時代に、この知の生産と消費にどのような変化が起こっているのかについて、大学内部の問題だけでなく、社会や企業社会との接続への影響も視野に入れなければならない。

(3) 教育内容の変化と大学生の就職

入学試験が選抜試験として機能しており、大学入学者の学業達成の能力をある程度予測できる範囲にあった時代には、大学教育内部のカリキュラムや教育内容を学生に合わせる必要はなかった。大学内部の知の変動は小さかった。

一方、このような時代には社会とくに企業社会においては、大学で獲得した知識や技術がそのまま現場で生かすことができるとは考えられていなかった。「訓練可能性」という言葉に表されているように、それぞれの会社や現場において必要な実地訓練がなされてはじめて、「知識は使いものになる」とされてきた。したがって、大学内部の知と大学

外部からの知への要求は実質的なレベルで厳密に対応させる必要もなかった。また、高卒と大卒の労働市場における棲み分けもある程度の安定性を維持していた。

しかしユニバーサル段階の大学では、入試方法の多様化により一定のカリキュラムでは学生の学力差や多様な学習動機／態度に対応できないため、補習教育や導入教育、初年次教育などにより大学の学びへの円滑な移行と標準化の努力がなされている。また、シラバスの導入をはじめ教育研究目的の明確化と教授方法の工夫等、知の生産方式については変化の中にあると言える。

このようなカリキュラムや教育プログラムの変化は、大卒労働市場の業種や職種における人材配分にも影響を与え、従来の大卒就職のイメージがそのまま当てはまらない職業分野や職種への拡大（周辺化）が起こっている。たとえば、資格系の学部学科の増加などによって、就職活動と採用活動のあり方が変化している。さらにこれと連動するように盛んになりつつある大学内部のキャリア教育が逆の方向から、すなわち大学の出口から内部に向かって、カリキュラムへ影響を与えるという構図を生み出している。

この状況は高等教育全体で起こっているであろうが、AO 入試や推薦入試などの非選抜型入試による入学者の比率が高い大学ほど、これまでとは比べられない実態的なレベルで（これまでの大学を支えてきた「教育の論理」＝教養主義に対抗するかのように）教育内容の職業的レリパンスが問われることによる知の変動（変質も含む）が大きいことが予想される。

2. 研究枠組と目的

高等教育を俯瞰して見ると、これまでは入学難易度によりピラミッド型を思い描くことで、全体像を把握できた。このピラミッドは、高校までの学力により推定される能力証明と学校歴という教育証明をシグナルに換えて社会へと安定的に供給してきた。しかし、ユニバーサル段階に入り、また志願者「全入時代」に突入した現在では、逆に入学難易度が、大学内部でどのような教育が行われ、どのような人材が要請され、社会へと接続していくのかについて実態的に語る指標ではなかったことをあぶり出す結果となっている。

ピラミッドはまだ見えるが、その姿はかつてほど鮮明ではなく、また部分部分によってその鮮明さは異なっているにちがいない。さらに言えば、大学そのものが多様なあり方を求められる時代において、ただ一つのピラミッドをイメージすること自体に無理が生じている。

本研究では、ピラミッドのなかでも入学難易度が相対的に低い大学群に注目する。ユニバーサル段階の高等教育において、知識の生産にかかわって最も大きな変化を経験し

ているのは入学難易度の相対的に低い大学群であろう。このような大学では、学生は入試の多様化により基礎学力において開きが大きく、進学意欲の裏付けがないまま入学してくる者が多く存在する。そのような場合、入学後の基礎学力の補填や学生の学ぶこと自体への動機付けなど、授業実践の困難を改善することが教育の大きな部分を占めることになる。平たく言えば、大学の「学校化」が実質的に起こっている^(注1)。

これを高校から大学への接続時に見る大学生の学力低下として捉えることもできる。しかし、この枠組みでは「本来、大学はこうあるべきなのに、こんな学生たちをどうしたらよいのか」といった従前の大学の基準を前提とした「(正統化された“大学の知”の空間に住む)地元民 vs. 新参者」図式にはまってしまう。新規参入者の比率の高い大学においては、正統化された“大学の知”の空間の論理を押し通せば、授業や教育は直ちに立ち行かなくなる。

この時点で、この問題は正統化された“大学の知”の体系を前提とした学力問題という領域をはみ出してしまうことになる(そもそも、この知の空間では「学力問題」自体が馴染まれていない)。新規参入者の学力を問題とするのではなく、大学内部で新規参入者が影響力のある新しい住人となることをどのように受け止めて行くのかという意味で、この変化を大学の既存の文化と移民文化のせめぎ合いとして描いてみることも可能であろう。

「そもそもこの下位大学にやってくるのはだれなのか」、彼らが大学までやって来ることになるその背景と彼らにとっての大学進学の意味を彼らの論理に沿って理解することで、大学の変化と知の変動の断面図をより実態的に描くことができるのではないか。

そこで、本研究では大学の既存の文化に対しては新規参入者であるが、大学に影響力のある新しい文化を持ち込む側でもある学生の視点から大学の変化を捉えたい。大学進学が高校生とその親にとってどのような意味をもつのか、彼らにとって「学歴」とはどのような意味をもつのか、さらには「学歴」をどのように生かそうとしているのかといった(「正統化された知」の文化にとって新規の)「大学利用者の論理」を中心に見ていく。

また、ここで設定する「大学の知の変動」という視角をさらに大学の外枠にまで拡大して見ると、大学の利用者である「学生/親」と知の提供者である「教員(大学)」間の「知識」の定義や生産方式をめぐるギャップは、今度は「教員(大学)」のアウトプットとしての人材(学生)と彼らを受け取る企業社会との間で新たな問題を生んでいる可能性がある。この地殻変動を大学の入口から出口までを通して描くことは本研究の範囲を超える。ここでは、入学難易度の相対的に低い大学における知の変動の一側面として、大学に影響力のある新しい文化を持ち込む学生が「大学における学びや知識」と「就職

やキャリア」をどのように関連づけているのかについて見ていく。

3. 先行研究

(1) 指標としての「親学歴」

われわれが本研究で視野に入れるのは、大学大衆化時代の親世代とユニバーサル段階の子世代である。対象とする学生は、1970年代後半から1980年代、マス段階の大学を経験した親をもつ集団と、同時代に高卒で働いてきた親をもつ集団である。

親世代と子世代をめぐる研究は、「教育と階層」研究において、主として親の学歴や職業が子の教育達成や職業達成にどの程度影響を与えるのかという観点から進められてきた。このマス段階の親世代の大学経験に焦点を当てた研究は子世代と関連づけられて考察されることは少なく、独立的に「大学文化」研究のなかで行われてきた。

一方、親学歴を社会階層（＝教育環境）の代理指標として読み替え、「教育機会・学業達成の階層間格差」研究がなされてきた^{（注2）}。たとえば、「家庭環境の中に、学校教育に適応しやすいあるいは適応しにくいレディネスを子どもの内に形成する何らかの要素が潜在して」おり、その結果、学業達成に格差が生じると予想する（潮木・佐藤、1979）。このような階層的不平等論の枠組みによる研究の後、文化的再生産論の視点から理論的に精緻化が進み、「階層文化は、単に“効果”を与えられる脇役としてではなく、学校文化を規定し、さらにそれによって新たに作り出される主役としての地位を与えられる」が、日本社会における階層文化の認知をめぐる議論が続いている（岩井他、1987、p. 125）。進学率によって社会的指標としての親学歴の意味（象徴性）や効果が相対的に変化することを考えると、とくにマス段階以降は親学歴（たとえば、高卒か大卒か、あるいは学校歴）と社会階層との対応関係は常に変動していると見てよい。

(2) 「親学歴」と文化資本

一方、ひとたび高学歴を取得すれば、出身階層にあまり関わりなくキャッチアップ文化資本を身につけることが報告されている（大前、2002）。「キャッチアップ文化資本」とは、学校教育を通じた「獲得文化資本」（相続文化資本との対比で）であり、日本の高等教育進学者が身につけている文化資本は、「客体化」「身体化」されたいずれの形態においても、この特徴をもつ可能性が高いという。つまり、「出身家庭の階層文化が世代間で相続継承されていくよりは、本人の教育程度によって文化資本が形成されていく面が強い」との知見が提出されている（大前、2002）。

出身階層の代理指標として親学歴や職業階層が独立した効果の子の世代にもたらすことにより文化的再生産が行われるのではなく、それが教育システムを介して行われるこ

とが実は戦略そのものであるという。すなわち日本の学歴社会における「文化的再生産」は、「教育システムが、家庭が保有している様々な種類の資本を、学歴資本へ、さらにはキャッチアップ文化資本へと向かわせる変換装置になっている」という仮説である。この仮説に準拠すれば、親学歴はそのシグナル性だけでなく、親の持つ教育（学校）経験が子の学歴の意味と効力の範囲を決定する可能性が生じてくる。

ここでわれわれの関心は 18 歳人口のうち大学へ進学しない「非進学層」であった集団が時を経て、高等教育の選抜システム（大学入試システムや高等教育あり方など）の変化により、「進学層」として登場するその舞台背景となる知の構造の変質にある。この「非進学層」が舞台に登場することになるためには、すでに見たように中等教育と高等教育のシステム上の接続の変化が条件となっている。単純化すれば、間口が広がったから結果的に進学率が高まったのである。しかし、高等教育への入学者層の質の変動を追うということになれば、進学動機や将来イメージを含む進路決定の段階まで遡る必要がある。ここに親の存在が「親学歴」というスクリーンを通して見えてくる。

(3) 「かつての非進学層」×親学歴（大卒 vs. 非大卒）

「親の大学経験を經由して（あるいは經由せずに）子が大学を経験する」という視点から見ると、「かつての非進学層」は大学で学業生活、学生生活、社会生活をどのように体験しているのだろうか。ここで注目する「かつての非進学層」とは、厳格な入学試験により選抜が行われることで入学者の質が統制されていた時代とは異なり、一定の学力を基準とせずに入学が可能になった時代の新規参入者であり、学業困難を抱えることが懸念される。

しかし、このような学生個人に帰することができるような学力という視点だけでは、「かつての非進学層」の理解として単純すぎるであろう。「かつての非進学層」である彼らは、入りやすくなったから大学へ来るのか、それとも親が大学に行っていたからごく自然な流れ（親も行ったから自分も行く）に乗って大学を選択しているのか。

「親学歴」とくに親が大学を経験しているかどうかが子の大学における学業達成や生活上の適応に関連をもつという視点は、アメリカでは「第一世代問題」として注目されてきた。そこでは、第一世代の学生（First Generation Students）は「低所得者層や身体障害者と並んで特別な学習支援が必要な対象」として捉えられているという（河野 2003、井上 2006b）。

井上は「出身家庭の文化的な落差を乗り越える必要がないため、一世でも受験学力の低い下層も大学に進学してくる。こうして難易度下位の大学から（順に）出身家庭の条件がストレートに反映されるようになる」と指摘する（井上 2006a）。この意味において、

大学内部の「正統化された知」の文化の変質という文脈のなかで「かつての非進学層」が何を経験しているのかを把握することが必要である。

仮に、ひとつの大学の内部で、「親が大学を経験している場合」と「親が大学を経験していない場合」により分けられる学生の2集団が異なる文化を持ち込んでいるとしたら、「地元民 vs. 新参者（かつての非進学層）」の構図に親が「大卒 vs. 非大卒」の図式が加わり、状況はさらに複雑になる。そのダイナミクスの一部でも描くことができれば本研究の第一の目標は達成できる。

(4) 「第一世代問題」と「かつての進学層」

本研究では、親学歴（「大卒」vs. 「非大卒」）は社会階層の代理指標としてよりは、「大学生活を経験した後、大卒資格を利用して就職した（あるいは、“しなかった”）」集団であることを指している。すなわち（マス段階の）大学文化を経由したという意味での文化的経験を持ち、学歴を資本に転換して職を得た経験を持つ親であるかどうかという点が重要である。また、高校と大学の接続において、進路指導、進学指導において高校成績が影響力をもつことから、「高校成績」も指標として組み入れる。これは「大学成績」との関連を見ることにより社会との接続（就職）をも視野に入れるためである。

そこで、次章では、「両親の大学卒業の有無（一世／二世）」と「高校での成績（下位／上位）」を掛け合わせた【一世＊下位】【一世＊上位】【二世＊下位】【二世＊上位】の4カテゴリーを作成し分析を行う。このカテゴリーは、基本的に井上(2006a)のものを踏襲している。井上は、大学1年生のみを対象として分析を行い、世代別では大学入学半年後の成績に差が見られないことを指摘し、むしろ親学歴と高校の成績の関連の仕方が異なると分析する。二世の場合は、大学の学業成績において、高校での成績上位群と下位群の差は小さくなっていくのに対し、一世の場合はその差が拡大する傾向がある（p.86）。

一方で、一世にはなく二世にはあるものも確かに存在する。一世は授業志向、二世はサークル志向であり、一世は二世よりも授業を難しいと感じる。従って、二世は授業の難しいと感じるか否かにかかわらず大学に来てサークルに加入するが、一世は大学は勉強するところだと思っているので、【一世＊上位】は授業に出席し【一世＊下位】はく勉強が嫌で）大学に来なくなる（p.87-90）。「大学は勉強だけするところではない」という大学大衆化時代経験者の親世代から継承された身体的な構え、つまり、大学に対する「適当な距離感」（p.91）が二世にはあるというのだ。

ここで、われわれが対象とする学生集団の高等教育の変化の流れにおける位置をあらためて明確にしておこう。ユニバーサル段階に入り、大学難易度ピラミッドはすでに不鮮明になってきている（図1）。したがって、高校難易度ピラミッドとの間にあった一定

の確率で対応していた関係も変化しているはずである（図 2）。本分析で対象とする Q 大学にやってくる学生は、以前であれば、高校ピラミッドの最下辺に位置している高校群の出身者であり、いわゆる「かつての非進学層」である。しかし、当該高校群のなかにも、進学校と非進学校が存在するため、Q 大学に同程度の学力で入学してくるとしても異なる高校文化を経験していると予想される。

図 1 高校進学率と大学進学率（1976，2007）〔（荒井，1999）を参考として作成〕

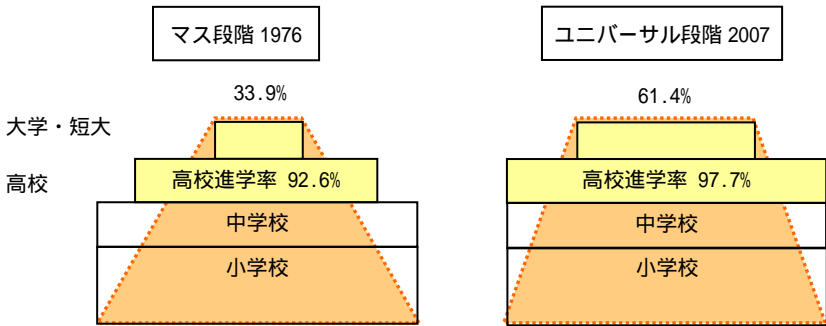
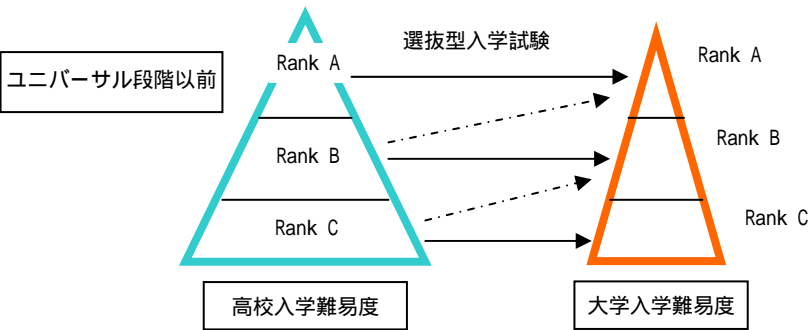
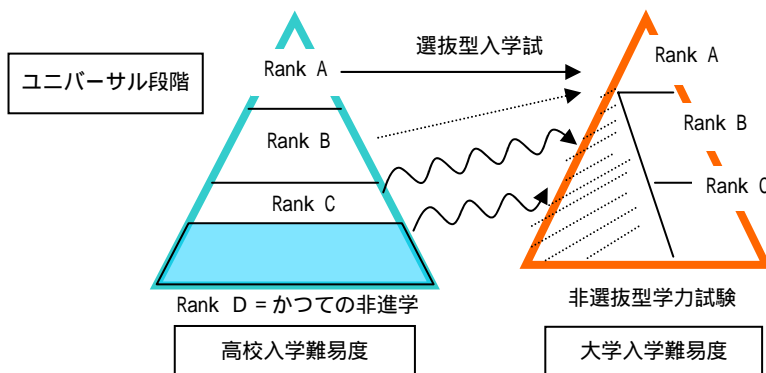


図 2 高校ピラミッドと大学ピラミッド





高等教育のユニバーサル段階において、入学難易度低位の大学にやってくる学生集団がどのような文化的（学習経験や学習態度を含む）特徴をもつのかを明らかにする作業そのものが、大学内部の「正統化された知」の文化の変動を推測させることになる。

4. データ分析

(1) 調査の概要

本研究が依拠するデータは、地方私立 Q 大学に入学した学生のパネルデータである。Q 大学の入学難易度は低位であり、英語、経営、心理学、教育、福祉の専攻が設けられている。

この調査では調査票に学籍番号の記入を求めているので、入学時から卒業時までの追跡できるため、パネルデータとしても分析が可能である。今回対象としたのは、2003 年度入学生（第一パネル）の一部 228 ケースと 2004 年度入学生（第二パネル）全員 396 ケースを合わせたもので、総標本数は 624 ケースである。2004 年度入学生全員を対象としているが、2003 年度入学生は心理学分野の学生のみを対象としているので、第一パネルのサンプル数は第二パネルの 6 割程度しかないが、ここでは学科別の分析は行わない。そのうち、両親の学歴と高校の成績が両方判明しているのは 326 ケースであるが、学年が上がるにつれてその数は減っている（表 1）。四年次までを対象としなかったのは、2003 年度入学生の四年次の調査時点でのサンプル数が極めて少なかったこと、かつ 2004 年度入学生の調査も、まだ集計されていないためである。

調査時期は、第一パネルが一年４月、６月、１０月の３回、二年秋に１回、三年秋に１回の計５回実施し、第二パネルは１年次に３回、二年春・秋の二回、三年秋に１回の計６回を実施した。二つのパネルデータの結合・分析にあたり、第二パネルのみの調査である二年春のデータは除外している。

すでに見たように、この４グループのタイプは、親がどの時代に大学を経験したのか（しないのか）、高校成績がどのようなタイプの選抜ピラミッドによるものかによって、実態的集団としては動的に変化するカテゴリーである。したがって、例として取り上げる本サンプルの４グループがどのような文化的（学習経験や学習態度を含む）特徴をもつのかということを明らかにする作業により、高校と大学の接続のあり方の変化とともに大学内部の「正統化された知」の変動の断面を描くことができると考える。

表 1. 調査回ごとの４グループの基本構成

		【一世＊ 下位】	【一世＊ 上位】	【二世＊ 下位】	【二世＊ 上位】	計
＊１年４月	第一パネル	24	26	41	48	139
	第二パネル	49	39	58	41	187
	小計	73	65	99	89	326
＊１年６月	第一パネル	23	25	35	44	127
	第二パネル	36	26	40	36	138
	小計	59	51	75	80	265
＊１年秋	第一パネル	20	23	31	42	116
	第二パネル	42	29	44	34	149
	小計	62	52	75	76	265
＊２年秋	第一パネル	18	25	26	35	104
	第二パネル	29	27	35	28	119
	小計	47	52	61	63	223
＊３年秋	第一パネル	16	19	21	27	83
	第二パネル	25	27	31	24	107
	小計	41	46	52	51	190

以下、この 4 グループの特徴を丹念に見ていくことで、大学内部で何が起こっているのか、その実態に近づいて行くことにする。

なおこの調査は、日本学術振興会科学研究費（基盤研究(B) 研究代表者：濱名篤、平成 16～18 年度）の助成を受けて行われた共同研究の成果の一部である。

(2) 4 カテゴリーの説明とデータの特徴

本研究では、「かつての非進学層」の参入により知の変動が大きいと思われる下位大学を誰がどのような形で利用し社会へと接続していくのかについて、1 年生から 3 年生の間の適応過程とキャリア意識の形成過程を明らかにして行く。そのため、操作的に親の大学卒業の有無と高校の成績を掛け合わせた【一世＊下位】【一世＊上位】【二世＊下位】【二世＊上位】の 4 グループを指標として見ていく。

両親の大学卒業の有無を示す（ここでは継承された文化資本の多少を示す指標として用いる）「二世／一世」の世代指標については、「あなたのご両親は、大学・短大を卒業されていますか」という問いに対して、「父親だけ卒業している」「母親だけ卒業している」「どちらも卒業している」と回答した人を「二世」、「どちらも卒業していない」と回答した人を「一世」とした。井上(2006a)では「どちらも卒業している」と回答した人だけを「二世」に分類し、「父親だけ卒業している」「母親だけ卒業している」と回答した人は分析から除外しているが(pp.82-3)、本分析では、年次ごとに回答者が減ることもあって、一定のサンプル数を確保しできるだけ多くの学生を分析対象とするため、「父親のみ卒業」「母親のみ卒業」のケースも「二世」として取り扱った。また、高校時代の成績については、「あなたの高校での成績は学年全体を基準にして比べると大体どのくらいでしたか」という問いに対し、「上位の方だった」「中の上くらいだった」のどちらかに回答した人を「上位」に、「中の下くらいだった」「下位の方だった」のいずれかに回答した人を「下位」に、それぞれ分類した。井上(2006a, p.83)と同様、「中くらいだった」と回答した人は、分析から除外した。

表 1 は、この 4 グループの調査回ごとのサンプル数と基本構成を示したものである。全体的に、学年が上がるほど回答者数は減少する。3 年秋のサンプルで親の学歴と高校の成績が判明するケースは 190 ケースに減り、一年次でのサンプル 326 ケースの 58.3%となる。Q大学に在学する学生全体の男女比は 2 対 1 である。本サンプルの 4 グループで、女子比率が最も多いのは【二世＊上位】で 41.6%、次に【一世＊上位】38.5%、【二世＊下位】【一世＊下位】でそれぞれ 25.5%と 23.3%である（表 2）。従って、4 つのグループの特徴を見ていく際には、ジェンダー構成を考慮する必要がある（注³）。

表 2. 4 グループの性別比率

	男子	女子
【一世 * 下位】	56(76.7)	17(23.3)
【一世 * 上位】	40(61.5)	25(38.5)
【二世 * 下位】	73(74.5)	25(25.5)
【二世 * 上位】	52(58.4)	37(41.6)

表 3. 一世・二世比率

	人数	%	有効%
一世	217	34.7	42.5
二世	293	47.0	57.5
不明	114	18.3	-
計	624	100.0	100.0

本サンプル全体の一世 / 二世比率は、一世 42.5%、二世 57.5%である(表 3)。井上(2006b)は、一世 / 二世の学生比率をシミュレーションで試算したが、それによると大学進学者における一世比率は 1975 年頃までは 8 割であった。その後徐々に一世比率は減って行き、2002 年ごろに逆転して二世比率が多くなっている(pp.122-3)。本サンプルもその趨勢を反映しており、二世が一世よりも多くなっている。

日本の場合、これまでの大学生はほとんどが第一世代であって、かつ入学試験に一定の選別機能が維持されていた。数年前までは当時の一世上位群の文化が大学空間で支配的だったと言える。二世にしても、大学に進学したのは高校での成績上位群であったはずである。「一世」「二世」と一括りにして呼び名をつけても、20 年前の一世と現在の一世では、集団としての性質も置かれた文脈も異なる。本サンプルの一世も二世も、20 年前であればまず進学してこなかった層なのである。一世・二世比率の逆転した大学空間における「かつての非進学層」の大学入学までの経験と大学での学びの構えや就職に向けての考え方や行動様式を明らかにし、そこに親世代の影響が如何に見られるのかを検討していこう。

(3) 大学入学までの経験

この 4 グループを分ける指標として用いている「高校成績」は実はトリッキーである。調査では成績は本人の申告によるため、出身高校がどのような高校であるかによって、「上位」「下位」が学力の絶対値から見れば逆転している可能性がある。以下では出身学科や出身高校の進学率、入試形態による選抜経路を辿ることで、実態としての 4 グループのイメージを掴んでみよう。

< 4 グループと入試形態 >

入学経路を、一般入試（学力試験中心）と指定校推薦（Q 大学専願）それ以外（公募制推薦、AO などの特別選考、非学力試験）の 3 種類に分けた場合、一般入試が 3 割から 4 割で、指定校推薦・その他の割合はグループによって変わる（表 4）。世代を問わず、高校の成績が上位の 2 グループが一般入試と準学力試験ともいえる指定校推薦を経て大学に入学し、下位の 2 グループは非学力試験で入学する傾向が確認できる。センター試験の受験者が満遍なく分布していることから、どのグループにも一定数、一定水準の学力を身につけた者が存在すると言えるが、グループごとの入学試験の分布傾向を見る限り、家庭の文化資本（二世）と高校で得られる「キャッチアップ」文化資本（成績上位）の総量が多い順に、学力入試・準学力入試を通過する割合が対応していると見ることができる（表 4）。

また、入試形態の違いには男女差はほとんど存在していない。従って、4 グループでの入試形態の違いは、親からの影響と、高校での学習習慣や成績が影響していると考えてよいだろう。

表 4. 入試形態比率

	一般入試	指定校推薦	それ以外	合計
【一世＊下位】	22(30.1)	16(21.9)	35(47.9)	73 (99.9)
【一世＊上位】	21(32.8)	26(40.6)	17(26.6)	64(100.0)
【二世＊下位】	40(40.8)	18(18.4)	40(40.8)	98(100.0)
【二世＊上位】	31(34.8)	37(41.6)	21(23.6)	89(100.0)

< 4 グループと出身学科 / 進学率 >

全国の大学等（短期大学等を含む）進学者に占める普通科出身者比率（定時制をふくむ）が 88.7%（平成 19 年度 学校基本調査速報）に比べると、本サンプルは「普通科以外」の学科出身者がいくぶん多いという特徴がある。さらに、どのような高校文化を経由してきたのかについて見ようとすれば進学率が次の手がかりとなる。

表 5. 出身高校の特徴と学力試験受験の割合

	普通科 出身	進学率 3/4 以上	進学率 1/2 以上	学力試験 入試	センター 受験	第一志望
	58	24	54	22	22	35
【一世＊下位】	(79.5)	(32.9)	(74.0)	(31.0)	(30.1)	(47.9)
	47	10	30	21	16	36
【一世＊上位】	(72.3)	(15.4)	(46.2)	(32.8)	(24.6)	(55.4)
	85	48	76	40	30	45
【二世＊下位】	(86.7)	(49.0)	(77.6)	(40.8)	(30.6)	(45.9)
	68	24	51	31	27	45
【二世＊上位】	(76.4)	(27.0)	(57.3)	(34.8)	(30.3)	(50.6)

表 5 を見ると、普通科出身者が最も多いのは【二世＊下位】で 86.7%、進学率が 3/4 以上だった学校に在籍していた学生の割合も【二世＊下位】で最も高く 49.0%であり、【一世＊下位】がそれに続く。大学進学に親和的なグループの中で高校時代を過ごした学生は、【一世＊下位】【二世＊下位】の 2 グループに多く、大学進学にあまり親和的でない空間で過ごした学生は、【一世＊上位】と【二世＊上位】に多い。大学への進学率を高校ランクとして読み替えるとすれば、高校ランクが高い順に【二世＊下位】【一世＊下位】【二世＊上位】【一世＊上位】となる。

しかし、この結果をもって、【一世＊下位】【二世＊下位】が学習習慣を身につけ、高い進学動機をもって入学している、そして【一世＊上位】と【二世＊上位】がその逆であると捉えるのは早計である。ここであらためて入試形態の様子を見ると、指定校推薦による入学者比率が特徴的である。

【一世＊上位】【二世＊上位】は、普通科以外の非進学校出身者が多いが、高校成績が良いため「指定校推薦」を経由するか、学力試験を通過して大学までやってくる。一方、【一世＊下位】【二世＊下位】は、進学校文化をもつ普通科出身だが、非学力試験を通過している比率からみればいわゆる受験準備は充分ではない状態で大学にやってきたと見える。

出身高校の「進学校文化」と「本人の学力、学習習慣や進学動機」の対応関係は「高校成績」によってねじれていると見るのが妥当であろう。

(4) 大学入学後の「適応」

次に、このような入学前の経歴が入学後にどのような経験につながっていくのを見ていこう。

表 6. 「適応」(学習適応/対人適応/生活適応)の年次変化

		1 年秋	2 年秋	3 年秋
【一世＊下位】	学習適応	41(66.1)	24(51.1)	29(58.0)
	対人適応	51(82.3)	38(80.9)	32(64.0)
	生活適応	47(75.8)	36(76.6)	36(60.0)
【一世＊上位】	学習適応	33(63.5)	35(68.6)	28(63.6)
	対人適応	38(73.1)	36(70.6)	36(81.9)
	生活適応	37(71.2)	41(80.4)	32(72.7)
【二世＊下位】	学習適応	44(58.7)	33(55.0)	31(63.3)
	対人適応	56(74.7)	48(80.0)	41(83.7)
	生活適応	49(65.3)	36(60.0)	36(73.5)
【二世＊上位】	学習適応	48(63.2)	31(49.2)	35(68.6)
	対人適応	54(71.1)	46(73.0)	41(80.4)
	生活適応	54(71.1)	43(68.3)	33(64.7)

4 グループとも、約 5 割以上の学生が「学習に適応している」と回答し、対人面に至っては実に 7 割程度の学生が「適応に成功している」と自己申告している(表 6)。学習適応していると回答した学生の割合と、「80 点以上取った科目が履修した科目の半分以上だった」および「四分の一以上だった」と回答した学生の割合を併記した表 7 を見ると、一年次から三年次まで一貫して【二世＊上位】【一世＊上位】【一世＊下位】【二世＊下位】の順に成績上位者が多いことがわかる。学力試験および指定校推薦入試を経由したときの比率ときれいに対応している。

表 7. 学習適応と成績

1 年秋				
	学習適応	80 点 半分 (A)	80 点 1/4 以上 (B)	(B) - (A)
【一世 * 下位】	41 (66.1)	23 (40.5)	39 (68.4)	27.9
【一世 * 上位】	33 (63.5)	30 (58.8)	42 (82.4)	23.6
【二世 * 下位】	44 (58.7)	34 (47.9)	51 (71.8)	23.9
【二世 * 上位】	48 (63.2)	46 (63.9)	54 (75.0)	11.1
2 年秋				
	学習適応	80 点 半分 (A)	80 点 1/4 以上 (B)	(B) - (A)
【一世 * 下位】	24 (51.1)	9 (19.6)	24 (52.2)	32.6
【一世 * 上位】	35 (68.6)	22 (45.8)	37 (77.1)	31.3
【二世 * 下位】	33 (55.0)	16 (28.1)	32 (56.1)	28.0
【二世 * 上位】	31 (49.2)	34 (54.8)	51 (82.3)	27.5
3 年秋				
	学習適応	80 点 半分 (A)	80 点 1/4 以上 (B)	(B) - (A)
【一世 * 下位】	29 (58.0)	10 (24.4)	25 (61.6)	37.2
【一世 * 上位】	28 (63.6)	19 (45.2)	30 (71.4)	26.2
【二世 * 下位】	31 (63.3)	10 (21.3)	31 (66.0)	44.7
【二世 * 上位】	35 (68.6)	27 (58.7)	33 (71.7)	13.0

しかしながら、学習適応の変遷と成績のデータを同時に見ると（表 7）、以下の二つの傾向を読み取ることができる。第一は、自らが「学習に適応している」と考える根拠がグループごとに異なっていること、第二に、4 グループを比較した場合、高校ランクと大学での成績が対応していないことである。

第一の問題から見ていこう。【一世 * 上位】【二世 * 上位】の 2 グループでは、「学習適応」していると答えた学生の割合と「履修科目の半分以上で 80 点以上を取った」学生の

割合がほぼ一致している。これに対し、【一世＊下位】【二世＊下位】では、「学習適応」の数値は「履修科目の四分の一以上で 80 点以上を取った」と回答する学生の割合に対応している。二年、三年と学年が上がるにつれて、この傾向が強まる様子が見られるとともに、両者の数字の対応関係がクリアになっている。

80 点以上を取った科目が「1/4 以上」であることと「半分以上」であることの違いを、「押しなべて良の成績を取る」こと（あるいは「悪くない成績を取る」と）と、「成績優秀であること」と解釈するでしょう。高校での成績上位 2 グループは、【二世＊上位】【一世＊上位】の順に自己評価が厳しく、【一世＊下位】【二世＊下位】の順に「悪くない」成績で満足していることになる。つまり、高校での成績上位群は、「成績優秀」であることが大学での学習面での「成功」であると考え、高校での成績下位群は「悪くない」だけの成績でも「成功」であると考えるのである。

4 グループのなかでも、【二世＊下位】は、良くも無く悪くもない成績（80 点以上取った科目「1/4」以上「半分」以下の割合）（表 7 の(B)-(A)欄を参照）を取る学生の割合が、三年次で 44.7%と最高である。上で触れた井上(2006a)の指摘する二世の「要領の良さ」仮説をさらに裏付ける結果となったが、【一世＊下位】も成績面で追い上げを見せる傾向も注目できる。

第二の問題に移ろう。高校で身につける学習への態度や進学文化の程度の差を示す高校ランクと、大学の成績のグループ間順位には乖離が見られる。大学で「成績優秀」であることは高校ランクとは関係が無く、むしろ高校での成績によって決定されていると言える。「成績優秀」で 3 年まで独走するのは、【一世＊上位】と【二世＊上位】である。【二世＊下位】は 3 年になると最下位に落ちてしまう。その半面、「悪くない成績」で大学生活を乗り切ることに関しては、高校での成績に加えて世代の効果が見られる。

学年進行で、80 点以上取った科目が「1/4 以上」であることと「半分以上」であることの差を見ると、【二世＊上位】が「成績優秀」面でも「悪くない成績をとる」面でも独走する。その次に【一世＊上位】が続いている。「成績優秀」には決してならず、しかし「悪くない成績を取ることをキープする集団は、高校ランク成績が 1 位の【二世＊下位】である。【二世＊下位】の「要領の良さ」が強調される結果になっている（表 7）。

偏差値によって大学が輪切りにされランク付けられている状態では、ある大学に入学する学生の偏差値レベルは同程度である。進学校での成績下位者も、非進学校での成績上位者も、偏差値にすればある程度の範囲内に収まっているはずである。しかし、高校ランクの高低にかかわらず、高校内部での相対的な成績順位によって、大学での学習結果に差異が生じる可能性があることは指摘しておくべきであろう。つまり、大学の方をコントロールした場合でかつ、その大学ランクが下位である場合、高校ランクと大学で

の成績は対応していない^(注4)。このことは、ユニバーサル段階において下位大学にやってくる学生を捉える上で重要な知見である。

以上、大学への適応、とくに学習適応の自己評価の分析から、4 グループの高校成績の大学成績への引き継がれ方、すなわち高校成績と大学での学習の構えの関連を検討した。

表 8. キャリア観の年次変化

	興味より 収入を重視		社会貢献を重視		就きたい職業が 決定済	
	2 年	3 年	2 年	3 年	2 年	3 年
【一世 * 下位】	10(21.3)		11(23.4)		19(40.4)	
	7(17.1)		13(31.7)		19(46.3)	
【一世 * 上位】	8(15.4)		11(21.2)		26(50.0)	
	9(19.6)		16(34.8)		31(67.4)	
【二世 * 下位】	16(26.2)		9(14.8)		19(31.1)	
	8(15.4)		11(21.2)		27(51.9)	
【二世 * 上位】	16(25.4)		24(38.1)		32(50.8)	
	15(29.4)		22(43.1)		30(58.8)	

	大学での学習を 活かす仕事		学力より 興味関心を重視		やりたい仕事が見つ かるまで就職しない	
	2 年	3 年	2 年	3 年	2 年	3 年
【一世 * 下位】	21(44.7)		30(63.8)		4(8.5)	
	18(43.9)		27(54.9)		7(17.1)	
【一世 * 上位】	25(48.1)		27(51.9)		4(7.7)	
	18(39.1)		33(71.7)		3(6.5)	
【二世 * 下位】	26(42.6)		30(49.2)		6(9.8)	
	16(30.8)		27(51.9)		7(13.5)	
【二世 * 上位】	42(66.7)		39(61.9)		6(9.5)	
	24(47.1)		33(64.7)		6(11.8)	

	これからは 学歴より実力	努力すれば 希望は実現	年功序列型給与 体系が安心だ
	2年 3年	2年 3年	2年 3年
【一世＊下位】	28(59.6) 32(80.0)	19(40.4) 22(53.7)	14(29.8) 15(36.6)
【一世＊上位】	32(61.5) 32(69.6)	31(59.6) 34(73.9)	14(26.9) 24(52.2)
【二世＊下位】	36(59.0) 31(59.6)	32(52.5) 26(50.0)	17(27.9) 15(28.8)
【二世＊上位】	37(58.7) 27(52.9)	37(58.7) 28(54.9)	21(33.3) 28(54.9)

	フリーターに なってもよい	大学入試は 人生の重大事	管理職になりたい
	2年 3年	2年 3年	2年 3年
【一世＊下位】	4 (8.7) 10(24.4)	15(31.9) 11(26.8)	15(31.9) 15(36.6)
【一世＊上位】	8(15.4) 5(10.9)	21(41.2) 18(39.1)	13(25.0) 13(28.3)
【二世＊下位】	4 (6.6) 8(15.4)	19(31.1) 14(27.5)	18(30.0) 16(30.8)
【二世＊上位】	8(12.7) 9(17.6)	32(51.6) 24(47.1)	14(22.2) 18(35.3)

独立して 仕事をしたい	
	2年 3年
【一世＊下位】	14(29.8)
	13(32.5)
【一世＊上位】	15(28.8)
	13(28.3)
【二世＊下位】	11(18.0)
	10(19.2)
【二世＊上位】	19(30.2)
	10(19.6)

(5) 就職行動とキャリア意識

次に、キャリアや仕事に対する意識の違いを見たいと思う。世代によって就職活動の方向性に違いが見られることが判明したが、ここではさらに、世代によって大卒という学歴をどう使おうとしているか、その結果どのような職業生活を展望しているかを中心にキャリア意識の差異を検討する。表 8 は、キャリアに対する考え方について尋ねたものである。各数字は、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた人を合計したものである（表 8 中の括弧内は％）。

< 世代による分析 >

一世は、独立して仕事をしたいと考える傾向が強く、仕事は実力で（学歴によらない）決めるべきだと考えている。二世は反対に、大学卒業の学歴をそれなりに利用する態度が表れているといえる。二世の方が学歴に「そこそこ」コミットし、大学生活をうまく泳いでいるからである。

一世は、大学に入っては来たが、その大学の「学歴」という記号を操作的に使って仕事をしようとは思っておらず、あくまでその背後にある「実力」が大事だと思っている。特に【一世＊上位】は、努力をすれば希望は実現すると考えている。しかしその後は、年功序列に乗って無難に職業生活を乗り切って生きたいと考えている。

< 高校成績による分析 >

大学に進学した【一世＊下位】【二世＊下位】は「入試は人生の重大事」とは思っていない。「就きたい職業が決まって」おらず、「学力より興味関心を重視して職業を選ぶべきだ」とも思っていない。「年功序列型給与が安心だ」とも思わない。成績下位群にとって、大学の４年間は、まさに社会に出るのが４年先延ばしになった程度の意味しか持っていないことになる。

ある程度大きな組織に入り、そこで職階を登っていくという職業生活をイメージしているのは高校での成績上位群である。高校での成績上位群【一世＊上位】【二世＊上位】の２グループで、「大学入試は人生の重大事」「年功序列型給与体系が安心だ」について「そう思う」と答える割合が高く、「これからは学歴より実力」と思っていない割合が高い。これには大学を通過することと職業決定とを関連付けて考えているか否かが表れている。

さらに、大学での成績について、３年生の段階で大学での学習と適度な距離を保つハビトウスについて世代の影響が見られることを考慮すると、「学力より興味関心を重視」とは考えない【一世＊上位】はあくまでも学校的なキャリア形成と行動に固執していると思われる。これに対して、【二世＊上位】では突出して「興味より収入」と答えているところからも、過度に理想化しない、現実的なキャリア観が見えてくる。【二世＊下位】は、よく言えばおおらかにキャリア形成を考えていると言え、選択肢を狭く設定していない印象を受ける。結局要領の良さで学習面を切り抜けて、社会性で仕事を見つけようとする。

< まとめ >

以上、「かつての非進学層」がどのように大学空間を利用しているのかについて、キャリア意識と行動によってまとめると、a. 大学に来ることと将来の仕事を関連づけて考えている層（【一世＊上位】【二世＊上位】）と、b. 大学で勉強した内容をそのまま使わないで就職をする層（【二世＊上位】【二世＊下位】）に分かれている。

a と b のどちらにも属さない【一世＊下位】は、就職活動とキャリア意識を見る限り、学歴によらない「実力」で「独立して仕事をする」方向に向かっている。大学空間で想定される就職活動とは別の就職活動をしている可能性がある。また、a と b の両方の特徴を合わせ持つ【二世＊上位】は、大学をうまく利用して、学びとの適度な距離を保ちながら就職へと至るルートを見つけ出すことができていると言えよう。

5. 考察

(1) 「かつての非進学層」の特徴

本研究では、ユニバーサル段階における入学難易度低位の「大学にだれがやってくるのか」、そして「学生は大学をどのように利用しているか」について、「大学における学びや知識」と「就職やキャリア」をどのように関連づけているのかを中心にみてきた。「かつての非進学層」である彼らにとって、大学進学の意味を彼らの論理に沿って理解することで、大学の変化と知の変動の一部でも実態的に把握することをめざした。

分析の結果、「かつての非進学層」を 親学歴 と 高校成績 を掛け合わせた4カテゴリーで見ると以下の特徴を持つことが分かった。以下では 高校成績の持つ意味 と 就職行動とキャリア意識 に分けて説明する。

< 高校成績の持つ意味 >

大学にやってくる経路は、家庭の文化資本(二世の方が多い)と高校で得られる「キヤッチアップ」文化資本(成績上位の方が多い)の総量が多い順に、学力入試・準学力入試を通過する割合が対応している(【二世*上位】【一世*上位】【二世*下位】【一世*下位】の順)。

高校での成績上位群は、「成績優秀」であることが大学での学習面での「成功」であると考え、高校での成績下位群は「そこそこ」の成績でも「成功」であると考えるのである。

総資本量が最も少ない【一世*下位】が3年次に成績面で追い上げを見せる傾向も注目に値する。

これらのことから、高校における成績は、非進学校か進学校かという文脈を超えて、大学の成績と相関をもっている可能性が高まった。本分析のサンプルでは成績下位層が進学校出身者であるのに、非選抜型試験によって大学やってきていた。入試形態によって、高校における学習習慣や学習態度を推測することは粗い分析であることは承知しているが、非選抜型試験が50%を超える時代のリアリティをかえって映し出しているように思える。すなわち、「進学校=偏差値が高い=選抜型試験で入学」といった図式はすでに崩れており、高校難易度ピラミッドの下辺の輪郭はぼやけてきているということだ。

また、高校の成績は、単純に大学の成績に引き継がれるというだけではなく、親の文化資本を通してキヤッチアップ資本に転化されている可能性も示唆された。ただし、総資本量が最も少ない【一世*下位】が3年次に成績面で追い上げを見せることから、高校成績の効果は大学の3年次までには、ある程度収斂する点も見逃すことはできない。

これは大学入学後の教育効果を表すと解釈することもできるが、大学教育が学業生活だけでなく学外学習や学外活動、広く社会生活をも含む重層的なものであることから、今後多面的に探索していく必要があるだろう。

<就職行動とキャリア意識>

就職行動に関しては、特定の業種を定めて大学の提供するサービスや資格・検定を限定的に使う傾向にあるのが一世グループ、自分の就く職業に関してはある程度オープンで人的資源と人間関係スキルを使って、満遍なく行動するのが二世グループである（表9）。

二世は「学校で学んでいることや経験が就職と結びつくわけではない」と考えていることから、マス段階の大学文化を親世代から受け継いでいる可能性がある。

表9. グループ内で多い就職行動（カッコ内は%）

【一世＊下位】	2年	「敬語やマナーの学習」(17.2)
		「大学の先生に進路相談」(10.3)
	3年	「キャリアセンターに個別相談」(72.7)
		「検定・資格を取った（取ろうとした）」(62.5)
【一世＊上位】	2年	「卒業した先輩に話」(22.2)
		「検定・資格」(18.5)
		「検定・資格」(59.8)
	3年	「キャリアセンターに相談」(55.6)
		「業界研究」(52.0)「問題集」(50.0)
【二世＊下位】	2年	「敬語やマナーの学習」(22.9)
		「検定・資格」(14.3)
		「就職部に個別相談に行った」(69.7)
	3年	「自己分析・職業適性検査」(62.5)
		「リクルートスーツ」(60.7)
【二世＊上位】	2年	「就職ガイダンス」(25.0)
		「自己分析・職業適性検査」(25.0)
		「キャリアセンターに個別相談」(60.0)
	3年	「自己分析・適性検査」(51.2)

表 10. 就職行動数の平均

	2 年秋	3 年秋
【一世 * 下位】	0.93 (N=29)	4.44 (N=36)
【一世 * 上位】	1.17 (N=35)	4.86 (N=50)
【二世 * 下位】	0.96 (N=27)	4.65 (N=43)
【二世 * 上位】	2.17 (N=28)	5.52 (N=50)

本分析で特記すべきは、【二世 * 上位】と【一世 * 上位】の対比である。【二世 * 上位】の 2 年次の就職行動のとりかかりの早さは、二世がどのように大学を利用しているのかを象徴的に表している（表 10）。これと対照的なのは、【一世 * 上位】である。かれらは、大学でまじめに勉強をすることがいい就職につながるとのイメージをもっているようだ。親が大学を経験していない彼らにとって、ユニバーサル段階の大学こそが「大学」なのである。すでに学校化が始まっている下位大学において、今後もっとも適応するはずのグループである。しかし、現実には厳しいものとなるであろう。葛城が指摘するように、「難易度が低い大学では、“教育成果”はあろうか、“高校時代の学習状況”のような基礎学力や学習レディネスの代理指標と考えることのできる変数すら就職の決定状況に有意な影響を及ぼしていない」からである（葛城、2007、p.216）。

大学で提供されている教育内容が職業的レリバンスをもたないと企業社会から捉えられ、それに呼応するかのように下位大学が学校化（あるいは職業学校化）して行くとしても、その大学への「適応」が無条件に喜ばしいことであるということとはできない。学が学生が大学をどのように利用しようとしているのか、これこそが重要な鍵を握っている。

一方、今なお大学の支配的文化は「正統化された知」の文化である。下位大学においてさえ教員はこの文化の住人である。それゆえ、二世は大学生活を道具的に用いるというよりは、大学空間に身を置いていること、大学生という身分であることを利用することが有効であることに手応えを感じることができる。そして、知識の積み上げだけでは無い間接的に身につけた社会性ともいような能力（スキル）を利用して、就職活動への構えを作り上げ、もって社会へと向かう。これは、親世代がマス段階の大学で身につけた術である。このことは、先に見た「大学大衆化時代経験者の親世代から継承された身体的な構え」、つまり、大学に対する『適当な距離感』という井上仮説を支持している。

(2) まとめと課題

本研究では、入学難易度の相対的に低い大学で必要なのは「学業困難を抱える学生への対策」であるという視点がそれほど有効性を持たないのではないかとこの前提に立っている。というのも、これまでも大学で求められる学力そのものがきちんと定義されたことはなく、大学という知の空間は曖昧な知識伝達により成り立ってきた。そうであれば、学生の学力よりも、そもそも大学が自らをどのように定義してきたのかという視点から捉える方が、現在大学が直面している戸惑いの解消に役立ちそうである。

大学は「正統化された知」の空間である。入学してくる学生はだれもが大学の既存の文化に対しては新規参入者であるが、今や彼らは大学に影響力のある新しい文化を持ち込む集団として勢力を拡げている。しかし、それは純粋な異文化ではない。もう一面では大学自身の過去の遺産を部分的に引き継ぐ二世集団を再度受け入れ続けている。二世が、親が大学を経由して獲得した文化を身につけているとすれば、下位大学における文化が学校化していれば戸惑いを感じるかもしれない。一方、一世のうち高校の成績下位層は、大学が学校化していてもしていなくても大学の学びを就職に生かすといった道筋を見出だすことができずに苦勞するかもしれない。

本研究では、下位大学のサンプルによって分析を行った。図 2 で示したように、大学ピラミッドの上の方では、非選抜型試験による入学者比率が相対的に低く、本サンプルで設定した仮説とは異なる状況であろう。しかし、現実にはどの大学でも入学者の学習履歴や進学動機の多様化が問題となっている。そうであれば、本研究が採用した大学入学者への文化論的アプローチ、すなわち現在の大学が抱える困難を各大学のもつ「正統化された知」の文化と各大学への新規学生の文化の葛藤として捉える方法がかえって実態の把握に有効なのではないか。そして、本研究では扱わなかったが、大学文化に親和的であるかどうかといった点から学生集団間の文化葛藤がさらに加わることになる。

最後に、本研究の先にある課題を展望として述べておきたい。本研究で使用した、同一のコーホートを 3 年間追跡できるデータのメリットは、十分生かされたと思われる。下位大学を経験する学生の特徴をより包括的に明らかにすることができたからである。今後、この文化論的アプローチとデータ分析をより大きな高等教育空間に位置づける必要がある。各大学で学生データを整備する動きが盛んになってきているが、複数の大学を横断する研究が望まれる。また、点数化された「成績」評価だけでなく、学生の「学力」の測定方法の精緻化および学習以外の学生生活の指標化によって、学生のキャリア形成と外部社会との接続がさらに明らかにされることが期待される。

【注】

（注１）このことは、さらに学校化の何が問題かというテーマを突きつける。すなわちこれまでの「大卒」という記号が持っていた「学士」という資格証明や「大学卒業程度の」能力証明という機能とその社会的意味を改めて確認する作業が必要となる。この検証によってはじめて「大卒」であることの利用者側と資格付与側のずれが見えてくるはずである。

（注２）「学歴」はこれまでの教育社会学の領域では、社会階層の指標として用いられてきた。たとえば高学歴層は相対的に高い職業階層に分布しており、「教育達成の機会」は親の職業階層によって大きく異なる」ことが知られている（SSM調査：菊池編 1990、近藤編 2000 など）。三段論法的に説明すれば、「親の学歴が高ければ親は高い職業階層に位置し、親の職業階層が高ければ子の教育達成の機会は高くなる」ということである。

（注３）高校の成績上位群で女子比率が高いことは、入試形態において「指定校推薦」による受験が多いことも関係している可能性がある。

（注４）このことは入試の多様化等、高校と大学の接続様式の変化を反映していると考えられる。

【参考文献】

- ・荒井克弘「高校と大学の接続 ―ユニバーサル化の課題―」『高等教育研究』第1集、1998、玉川大学出版部、pp.179-197.
- ・荒牧草平「教育機会の格差は縮小したか ―教育環境の変化と出身階層間格差―」近藤博之編『日本の階層システム3 戦後日本の教育社会』東京大学出版会、2000、pp.15-35.
- ・荒牧草平「現代高校生の学習意欲と進路希望の形成」『教育社会学研究』第71集、2002、東洋館出版社、pp.5-24.
- ・有本章、金子元久、伊藤彰浩「高等教育研究の動向」『教育社会学研究』第45集、1989、東洋館出版社、pp.67-106.
- ・井上義和「初年次教育における第一世代問題」『初年次教育 ―歴史・理論・実践と世界の動向―』濱名篤・川嶋太津夫編著、2006a、丸善、pp.81-93.
- ・井上義和「学生文化における第一世代問題」『子ども・学校・社会 ―教育と文化の社会学―』、2006b、世界思想社、pp.116-135.
- ・岩井八郎、片岡栄美、志水宏吉「“階層と教育”研究の動向」『教育社会学研究』第42集、1987、東洋館出版社、pp.106-129.
- ・潮木守一、佐藤智美「社会階層と学業成績に関する実証的研究」『名古屋大学教育学部紀要』第26巻、1979

- ・浦坂純子、西村和雄、平田純一、八木匡「人的資本蓄積における世代間効果の分析」『大学論集』第 34 集、2003、広島大学高等教育研究開発センター、pp.295-307.
- ・大前敦巳「キャッチアップ文化資本による再生産戦略 日本型学歴社会における『文化的再生産』論の展開可能性」、『教育社会学研究』第 70 集、2002、東洋館出版社、pp.165-184.
- ・小方直幸「大学教育と仕事 ー研究の動向と課題ー」『大学論集』第 24 集、1995、広島大学大学教育研究センター、pp.295-307.
- ・加藤善子・吉原恵子「キャリア形成への二つの道 - 自発的参加と非自発的参加(1) - 」日本キャリア教育学会発配布資料、2006 年 11 月 12 日.
- ・Kato, Y. and Yoshihara, K., *Are Non-First Generation Students Successful?*, The 20th International Conference on the First-Year Experience配布資料, Hawaii s Big Island, United States, 2007 July.
- ・河野銀子「大学第一世代の進路選択」『ユニバーサル段階における“大学第一世代”への学習支援に関する基礎的研究』平成 15-17 年度科研費基盤研究 B2 報告書（代表・濱名陽子関西国際大学教授）2006、pp.83-98.
- ・河野銀子「大学大衆化時代における First-Generation の位相」『山形大学紀要（教育科学）』第 13 巻 第 2 号、2003、pp.127-143.
- ・菊池城司「学歴・階層・職業」『教育社会学研究』第 50 集、1989、東洋館出版社、pp.87-106.
- ・菊池城司編『教育と社会移動』1985 年「社会階層と社会移動全国調査（SSM 調査）」委員会、1988、日本図書センター
- ・葛城浩一「就職率の教育成果指標としての妥当性」『大学論集』第 38 集、2007、広島大学大学教育研究センター、pp.207-220.
- ・近藤博之編『教育と世代間移動』（SSM 調査シリーズ 10）1995 年「社会階層と社会移動全国調査（SSM 調査）」委員会、1998、日本図書センター
- ・武内清「学生文化の規定要因に関する実証的研究 ー15 大学・4 短大調査からー」『大学論集』第 29 集、2000、広島大学大学教育研究センター、pp.189-202.
- ・竹内洋「高等教育と労働市場 ー学歴・ねじれ効果・市場能力ー」『教育社会学研究』第 45 集、1989、東洋館出版社、pp.51-66.
- ・中西新太郎『情報消費型社会と知の構造』1998、旬報社
- ・濱名篤「学生 の教育期待の変容と大学評価」『高等教育研究』第 3 集、2000、玉川大学出版部、pp.125-146.
- ・濱名篤ほか『初年次教育を中心とする継続型教育プログラムの開発と質的保証に関する国際比較研究』平成16年度～平成18年度科学研究費補助金（基盤研究(B)）研究成果報告

書（研究代表者：濱名篤）2007.

・林未央「高等教育ユニバーサル化の文脈における就学行動モデルの変容」『教育社会学研究』第 72 集、2003、東洋館出版社、pp.191-212.

・矢野眞和「大学・知識・市場　特集にあたって」『高等教育研究』第 4 集、2001、玉川大学出版部、pp.7-17.

・矢野眞和「雇用と大卒労働市場」『大学論集』第 22 集、1993、広島大学大学教育研究センター、pp.165-185.

・矢野眞和・濱中淳子「なぜ、大学に進学しないのか」『教育社会学研究』第 79 集、1989、東洋館出版社、pp.85-104.

・山内乾史・原清治「高校生の進路選択の実態　・“ポスト・バブル”期の進学行動・」『大学論集』第 26 集、1997、広島大学大学教育研究センター、pp.207-217.

・吉原恵子・加藤善子「キャリア形成への二つの道 - 自発的参加と非自発的参加(2) - 」日本キャリア教育学会配布資料、2006 年 11 月 12 日.

・吉本圭一「大学教育と職業への移行　・日欧比較調査結果より・」『高等教育研究』第 4 集、2001、玉川大学出版部、pp.113-134.

Underprepared Students Use of College: Student Success Indicated by Educational Background of Parents and High-school Grade

Keiko, Yoshihara (Hyogo University)

Yoshiko, Kato (Kansai University of International Studies)

This paper shows that student success in college has two aspects: academic performance and smooth transition to the world of work, and that they are determined by three factors: academic performance in high-school, that in college and having a parent graduated from college.

Dividing our student samples, those of a rank C college in the universalized stage of higher education, into four groups by generation and high-school grade, their paths of college experiences from their first year through third year are examined. Three most significant findings are:

- 1) High-school grade can be a good predictor of academic success of students in college;
- 2) By their third year groups of lower high-school grade catch up on academic performance; and
- 3) Preparation for job-hunting and preference in future jobs are differentiated by generation.

College experience and getting a job are loosely connected; however, this connection is not based on good academic performance. This loose connection is rather represented by a certain attitude: "keeping an adequate distance" from what college provides. The non-first generation students are successful being moderately committed to college life as well as utilizing the symbolic value of college diploma for their future. To the contrary, first generation students seem to have difficulty being connected to their college experiences in order to get prepared for a job; they tend to use college as a vocational school to be too much committed in studying, or disconnect their future from their college experiences and its meanings.

This implies that simply improving academic performance of students, which this

college seems successful in, would not bridge the gap between first-generation and non-first generation students. Even underprepared for college, non-first generation students use their inherited cultural capital, such as knowledge on and attitude toward college and future, to survive in college and connect themselves to the world of work.